

米国農務省穀物等需給報告(2022年1月12日発表のポイント)

令和4年1月13日
大臣官房政策課食料安全保障室

米国農務省は、1月12日(現地時間)、2021/22年度の9回目の世界及び主要国の穀物・大豆に関する需給見通しを発表した。その概要は以下のとおり。

ー2021/22年度の穀物の生産量は消費量を下回る見込み

1. 世界の穀物全体の需給の概要(見込み)

(※↑↓は前月見通しからの増減)

- ① 生産量: 27億8,852万トン(対前年度比 2.6%増) ↓
- ② 消費量: 27億9,173万トン(対前年度比 2.1%増) ↓
- ③ 期末在庫量: 7億9,408万トン(対前年度比 0.4%減) ↓
期末在庫率: 28.4%(対前年度差 0.7ポイント減) ↓

【主な品目別の動向】

小麦 : 世界の生産量は、アルゼンチンで史上最高となり、EUで引き上げられたことから、前月から上方修正され、史上最高となる見通し。世界の消費量は、米国やEUで飼料用需要が引き下げられたこと等から、前月から下方修正され、史上最高の見通し。世界の生産量は、消費量を下回り、期末在庫量は前年度を下回る見通し。なお、ロシアは2月半ばから6月末まで小麦の輸出枠800万トンの設定を公表した。

- ① 生産量: 7億7,860万トン(対前年度比 0.4%増) ↑ ・EU、ウクライナ、英国、アルゼンチン、中国等で増加、カナダ、ロシア、米国、カザフスタン等で減少
- ② 消費量: 7億8,747万トン(対前年度比 0.6%増) ↓ ・EU、インド等で増加
- ③ 期末在庫量: 2億7,995万トン(対前年度比 3.1%減) ↑ ・米国、中国等で減少
期末在庫率: 35.6%(対前年度差 1.3ポイント減) ↑

とうもろこし : 世界の生産量は、米国で収穫面積が引き上げられたものの、12月の乾燥によりアルゼンチンの単収が引き下げられ、ブラジルでも南部での単収見通しが引き下げられたことから、前月から下方修正されたものの、史上最高となる見通し。世界の消費量は、米国でエタノール向け需要が引き上げられたことから、前月から上方修正され、前年度を上回る見通し。世界の生産量は消費量を上回り、期末在庫量は前年度を上回る見通し。

- ① 生産量: 12億696万トン(対前年度比 7.5%増) ↓ ・ブラジル、米国、中国、ウクライナ、アルゼンチン、EU等で増加(前月に比べウクライナで上方修正、ブラジルで下方修正)
- ② 消費量: 11億9,612万トン(対前年度比 5.2%増) ↑ ・中国、米国、カナダ、EU、ブラジル等で増加(前月に比べ米国で上方修正)
- ③ 期末在庫量: 3億307万トン(対前年度比 3.7%増) ↓ ・米国、中国等で増加(前月に比べブラジルで下方修正)
期末在庫率: 25.3%(対前年度差 0.4ポイント減) ↓

コメ(精米) : 世界の生産量は、マリアスリランカ等で引き下げられたことから、前月から下方修正されたものの、史上最高となる見通し。世界の消費量も史上最高となる見通し。世界の期末在庫量は前年度をわずかに下回る見通し。

- ① 生産量: 5億987万トン(対前年度比 0.5%増) ↓ ・インド等で増加
- ② 消費量: 5億1,029万トン(対前年度比 1.6%増) ↓ ・中国、インド等で増加
- ③ 期末在庫量: 1億8,606万トン(対前年度比 0.2%減) ↓ ・インド等で増加、中国等で減少
期末在庫率: 36.5%(対前年度差 0.7ポイント減) ↓

2. 世界の大豆需給の概要(見込み)

世界の生産量は、米国で単収が引き上げられたものの、12月から1月上旬の乾燥等によりブラジル、アルゼンチン等で生産量が引き下げられたことから前月から下方修正されたものの、史上最高となる見通し。世界の消費量は前年度を上回る見通し。世界の生産量が消費量を下回り、期末在庫量は前年度を下回る見通し。

- ① 生産量: 3億7,256万トン(対前年度比 1.7%増) ↓ ・米国等で増加、中国等で減少(前月に比べブラジル、アルゼンチンで下方修正)
- ② 消費量: 3億7,493万トン(対前年度比 3.3%増) ↓ ・中国等で増加
- ③ 期末在庫量: 9,520万トン(対前年度比 4.7%減) ↓ ・米国等で増加、ブラジル、アルゼンチンで減少(前月に比べ、ブラジル、アルゼンチンで下方修正)
期末在庫率: 25.4%(対前年度差 2.1ポイント減) ↓

世界の穀物・大豆の需給動向

(米国農務省2022年1月12日発表)

【穀物】

(単位：百万ト)

項目	年度	2019/20	2020/21 (見込み)	(予想)	2021/22		(参考) 2012/13
					前年度比 (期末在庫率は 「前年度差」)	前月差	
全体							
生産量		2,678.26	2,717.01	2,788.52	2.6%	▲ 1.8	2,295.8
消費量		2,673.10	2,734.11	2,791.73	2.1%	▲ 1.8	2,284.5
期末在庫量		814.38	797.29	794.08	▲ 0.4%	▲ 1.5	479.9
期末在庫率		30.5%	29.2%	28.4%	▲ 0.7	▲ 0.0	21.0%
小麦							
生産量		762.20	775.87	778.60	0.4%	0.7	660.5
消費量		746.92	783.04	787.47	0.6%	▲ 1.9	680.0
期末在庫量		295.99	288.82	279.95	▲ 3.1%	1.8	181.1
期末在庫率		39.6%	36.9%	35.6%	▲ 1.3	0.3	26.6%
粗粒穀物							
生産量		1,417.22	1,433.90	1,500.05	4.6%	▲ 1.6	1,159.1
消費量		1,432.45	1,448.61	1,493.97	3.1%	0.8	1,139.5
期末在庫量		336.70	321.99	328.07	1.9%	▲ 2.6	175.8
期末在庫率		23.5%	22.2%	22.0%	▲ 0.3	▲ 0.2	15.4%
とうもろこし							
生産量		1,119.71	1,122.83	1,206.96	7.5%	▲ 1.8	898.8
消費量		1,135.81	1,136.87	1,196.12	5.2%	0.2	877.4
期末在庫量		306.27	292.23	303.07	3.7%	▲ 2.5	144.8
期末在庫率		27.0%	25.7%	25.3%	▲ 0.4	▲ 0.2	16.5%
コメ(精米)							
生産量		498.84	507.24	509.87	0.5%	▲ 0.9	476.2
消費量		493.73	502.45	510.29	1.6%	▲ 0.6	465.0
期末在庫量		181.69	186.48	186.06	▲ 0.2%	▲ 0.7	123.0
期末在庫率		36.8%	37.1%	36.5%	▲ 0.7	▲ 0.1	26.5%

【大豆】

項目	年度	2019/20	2020/21 (見込み)	(予想)	2021/22		(参考) 2012/13
					前年度比	前月差	
生産量		339.88	366.23	372.56	1.7%	▲ 9.2	269.0
消費量		358.36	362.83	374.93	3.3%	▲ 2.1	265.2
期末在庫量		95.60	99.88	95.20	▲ 4.7%	▲ 6.8	58.1
期末在庫率		26.7%	27.5%	25.4%	▲ 2.1	▲ 1.7	21.9%

資料：米国農務省「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(January 12, 2022)

「Oilseeds: World Markets and Trade」、 「PS&D」

注：1) 穀物全体は、小麦、粗粒穀物、コメ(精米)の計。なお、各品目の計が全体の数値と合わない場合がある。

2) 小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

3) 期末在庫率(%) = 期末在庫量 × 100 / 消費量

4) 年度のとり方は、品目及び地域により異なる。[例えば、米国では、小麦(6~5月)、とうもろこし(9~8月)、コメ(8~7月)、大豆(9~8月)]

5) 在庫率の前年度比及び前月差の欄は、前年度及び前月発表とのポイント差。

なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合がある。

6) (参考)は、直近の価格高騰の原因となった2012/13年度の需給について掲載。

7) なお、「Oilseeds: World Markets and Trade」、 「PS&D」 については、公表された最新のデータを使用している。

米国の穀物・大豆の需給動向

(米国農務省2022年1月12日発表)

【穀物】

(単位：百万ト)

項目	年度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22 (予想)	2021/22		(参 考) 2012/13
					前年度比 (期末在庫率は 「前年度差」)	前月差	
全体							
生産量		417.89	429.86	449.59	4.6%	0.7	353.0
消費量		355.75	351.02	359.34	2.4%	1.1	317.1
輸 出 量		79.82	107.45	94.99	▲ 11.6%	▲ 2.6	51.6
期末在庫量		80.73	58.40	59.76	2.3%	1.8	44.2
期末在庫率		18.5%	12.7%	13.2%	0.4	0.4	12.0%
小麦							
生産量		52.58	49.75	44.79	▲ 10.0%	-	61.3
消費量		30.44	30.48	30.97	1.6%	▲ 0.7	37.8
輸 出 量		26.37	26.99	22.45	▲ 16.8%	▲ 0.4	27.5
期末在庫量		27.99	23.00	17.09	▲ 25.7%	0.8	19.5
期末在庫率		49.3%	40.0%	32.0%	▲ 8.0	2.1	29.9%
粗粒穀物							
生産量		359.43	372.89	398.71	6.9%	0.8	285.3
消費量		320.73	315.70	323.75	2.5%	1.9	275.5
輸 出 量		50.46	77.48	69.75	▲ 10.0%	▲ 2.2	20.7
期末在庫量		51.83	34.01	41.63	22.4%	1.0	23.5
期末在庫率		14.0%	8.6%	10.6%	1.9	0.3	7.9%
とうもろこし							
生産量		345.96	358.45	383.94	7.1%	1.4	273.2
消費量		309.55	306.54	315.23	2.8%	2.0	263.0
輸 出 量		45.13	69.92	61.60	▲ 11.9%	▲ 1.9	18.5
期末在庫量		48.76	31.36	39.11	24.7%	1.2	20.9
期末在庫率		13.7%	8.3%	10.4%	2.0	0.3	7.4%
コメ(精米)							
生産量		5.88	7.22	6.09	▲ 15.7%	▲ 0.1	6.3
消費量		4.59	4.85	4.62	▲ 4.7%	▲ 0.1	3.8
輸 出 量		2.99	2.98	2.79	▲ 6.4%	▲ 0.0	3.4
期末在庫量		0.91	1.39	1.05	▲ 24.5%	▲ 0.1	1.2
期末在庫率		12.0%	17.8%	14.2%	▲ 3.6	▲ 0.5	16.1%

【大豆】

項目	年度	2019/20	2020/21 (見込み)	2021/22 (予想)	2021/22		(参 考) 2012/13
					前年度比	前月差	
生産量		96.67	114.75	120.71	5.2%	0.3	82.8
消費量		61.85	60.92	62.79	3.1%	0.0	48.6
輸 出 量		45.70	61.66	55.79	▲ 9.5%	-	36.1
期末在庫量		14.28	6.99	9.52	36.2%	0.3	3.8
期末在庫率		13.3%	5.7%	8.0%	2.3	0.2	4.5%

資料：米国農務省「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(January 12, 2022)
「Oilseeds: World Markets and Trade」、 「PS&D」

注：1) 穀物全体は、小麦、粗粒穀物、コメ(精米)の計。なお、各品目の計が全体の数値と合わない場合がある。

2) 小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

3) 期末在庫率(%) = 期末在庫量 × 100 / (消費量 + 輸 出 量)

4) 年度のとり方は、品目及び地域により異なる。[例えば、米国では、小麦(6~5月)、とうもろこし(9~8月)、コメ(8~7月)、大豆(9~8月)]

5) 在庫率の前年度比及び前月差の欄は、前年度及び前月発表とのポイント差。
なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合がある。

6) (参考) は、直近の価格高騰の原因となった2012/13年度の需給について掲載。

7) なお、「Oilseeds: World Markets and Trade」、 「PS&D」 については、公表された最新のデータを使用している。

(参考1)

世界の穀物の価格動向 (2021年)

● 小麦 : 7.59 ドル/bu (前年同時期の価格 : 6.39 ドル/bu)

(価格は、シカゴ商品取引所における2022年1月第1週末のセツルメント価格)。

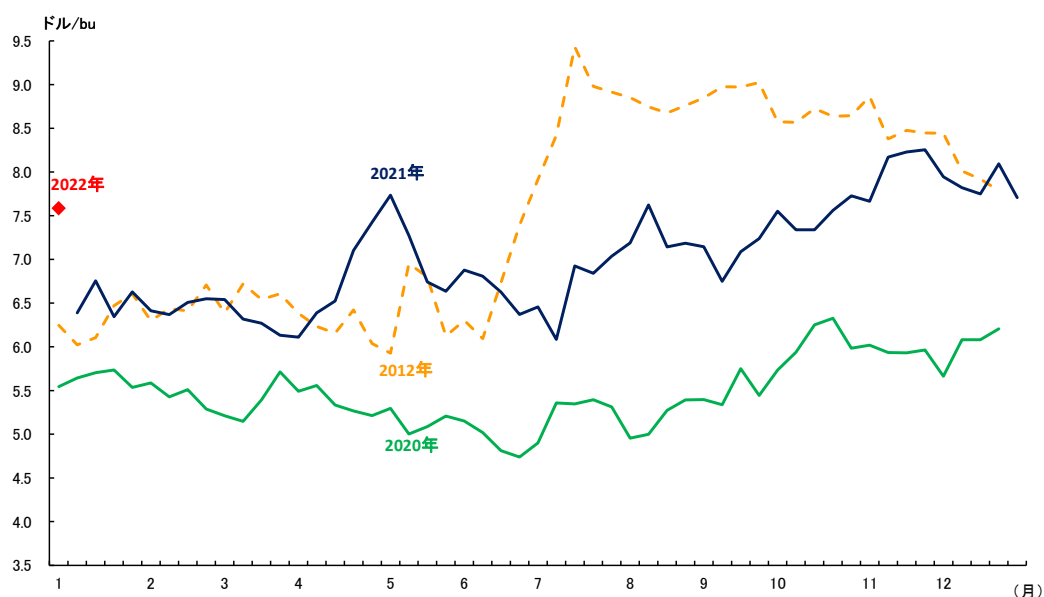
2021年1月に入り、USDA(米国農務省)の1月需給報告での世界や米国の期末在庫量の下方修正、ロシアの3月からの輸出税拡大等から、一時6ドル/bu台半ばから後半に値を上げたものの、2月上旬には、USDA2月需給報告での米国産小麦在庫量の据置等から一時6ドル/bu台前半に値を下げた。2月中旬から3月上旬にかけて、黒海地域の寒波や米国冬小麦地帯の寒波と乾燥天候から6ドル/bu台半ばで推移したものの、3月中旬以降、米国冬小麦の作柄改善見通し等から、6ドル/bu前後に値を下げた。

3月末には、米国作付意向面積結果によるとうもろこし、大豆価格上昇から、6ドル/bu台前半に値を戻し、4月初旬以降も、米国の春・冬小麦地帯の乾燥天候や、カナダの作付意向面積の減少等から、5月上旬に7ドル/bu台後半まで値を上げた。その後、5月半ばから同月末にかけて、USDA5月需給報告での市場予想を上回る米国産小麦の期末在庫量、春小麦生産地帯の降雨予報、とうもろこし価格下落等から6ドル/bu台半ばに値を下げた。

6月に入り、春小麦地帯の乾燥天候から、一時6ドル/bu台後半に値を上げたものの、6月中旬から下旬にかけて、世界的な小麦の増産見通し等から6ドル/bu台前半に値を下げた。6月末には、米国作付面積報告で上昇したとうもろこし、大豆価格に追随し、6ドル/bu台後半まで値を上げたものの、7月上旬に、米国産冬小麦の収穫進展等から、6ドル/bu台前半まで値を下げた。

7月中旬以降、USDA7月需給報告で米国産小麦の生産量が市場予測を大幅に下回ったこと、米国プレーンズ北部の高温・乾燥天候の影響懸念、USDA8月需給報告でのロシア、カナダの生産量見通しの大幅な下方修正から、8月中旬には7ドル/bu台半ばまで値を上げたものの、8月末にかけて、とうもろこし、大豆価格の低下等から、7ドル/bu前後に値を下げた。

9月に入り、USDA9月需給報告で世界の期末在庫量が上方修正されたこと等から、6ドル/bu台後半に値を下げた。9月中旬以降、カナダ等の生産量の下方修正や、米国の低水準なUSDA在庫報告、USDA10月需給報告での低水準な世界の期末在庫量、中国の降雨過多による播種遅延、USDA11月需給報告での世界の期末在庫量の下方修正、ロシアの輸出規制強化の懸念等から8ドル/bu台半ばまで値を上げたものの、豪州産の史上最高の生産量見込み等から11月末には7ドル/bu台後半まで値を下げた。12月に入り、米国冬小麦産地の乾燥懸念や世界的な供給懸念、旺盛な世界需要から8ドル/bu台前半まで値を上げたものの、アルゼンチンの豊作予測や12月下旬の米国冬小麦産地の降雪予報から値を下げ、12月末現在7ドル/bu台後半で推移。



注:シカゴ商品取引所の各週末の期近価格(セツルメント)である。
グラフは、価格が高騰した2012年と直近3年の価格の推移。

● とうもろこし：6.07 ドル/bu （前年同時期の価格：4.96 ドル/bu）

（価格は、シカゴ商品取引所における2022年1月第1週末のセツルメント価格）。

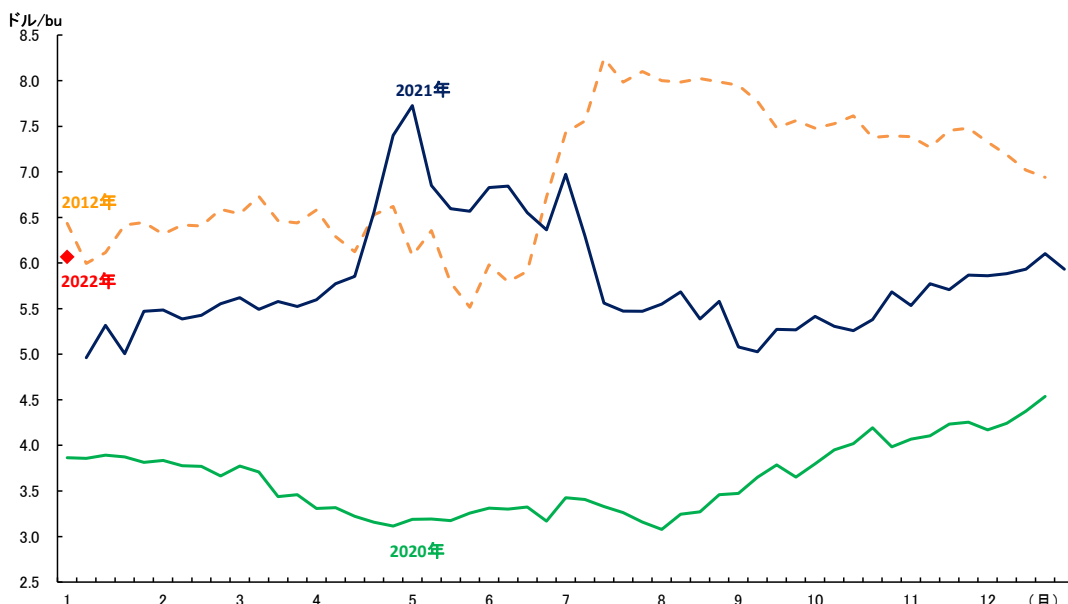
2021年1月に入り、アルゼンチンのとうもろこし輸出停止の発表とストライキ、順調な米国産の輸出、USDA 1月需給報告での米国や南米の生産量の下方修正等から5ドル/bu 台半ばまで値を上げたものの、南米の降雨から1月下旬に一時5ドル/bu 前後に値を下げた。その後、1月末には、好調な中国向け輸出から、5ドル/bu 台半ばまで値を上げたものの、2月中旬に、USDA 2月需給報告で米国産の在庫予測が市場予想を上回り、5ドル/bu 台前半に値を下げた。

2月末には、ブラジルの冬とうもろこしの作付遅延等で、5ドル/bu 台半ばに値を上げたものの、3月初旬から4月初旬にかけ、南米の天候の改善も、米国産とうもろこしの中国向けを中心とした順調な輸出、予想を下回る3月末の米国作付意向面積から、5ドル/bu 台半ばで推移した。

4月上旬以降、好調な輸出需要とエタノール需要の回復、米国中西部の低温・乾燥による作付け・生育への影響懸念やブラジルの乾燥天候による冬とうもろこしへの影響懸念等から上昇し、5月上旬には7ドル/bu 後半まで値を上げた。その後、米国中西部の天候回復と作付けの順調な進展等から6ドル/bu 台前半まで値を下げたものの、好調な輸出需要や、米国中西部の高温・乾燥、ブラジルの降雨不足から、6月上旬に再び7ドル/bu 前後まで値を上げた。6月中旬から下旬にかけて、米国中西部の降雨や順調な生育から6ドル/bu 台前半まで値を下げたものの、6月末の米国作付面積報告で予想を下回る作付面積となったことから、6月末に7ドル/bu 台前半に値を上げた。

7月に入り、USDA 7月需給報告で米国産とうもろこしの生産量予測が上方修正されたこと、主要産地での降雨や良好な天気予測等から5ドル/bu 台半ばに値を下げた。その後、8月上旬にかけ、米国コーンベルト北西部の高温・乾燥やUSDA 8月需給報告の市場予想を下回る米国の生産量予測、干ばつや霜害によるブラジル産冬とうもろこし生産量予測の下方修正に支えられ、5ドル/bu 台半ばで推移したものの、8月末の米国主要産地の降雨、ドル高や8月末のハリケーンにより米国ガルフ地域の穀物輸出施設が損傷を受けたこと等による輸出停滞懸念から、9月上旬には4ドル/bu 台後半に値を下げた。9月中旬以降、米国の収穫進展等から一時値を下げたものの、堅調な原油価格によるエタノール生産量の増加、10月下旬の米国での降雨による収穫遅延等から5ドル/bu 台半ばに値を上げた。

11月に入り、原油相場下落や南米の順調な作付から一時値を下げたものの、小麦や大豆価格に支えられ5ドル/bu 台半ばで推移。12月に入り、ラニーニャ現象に伴う南米の乾燥懸念から一時6ドル/bu 台前半まで値を上げたものの、その後の南米の降雨等から値を下げ、12月末現在、5ドル/bu 台後半で推移。



注：シカゴ商品取引所の各週週末の期近価格（セツルメント）である。
 グラフは、価格が高騰した2012年と直近3年の価格の推移

●コメ：435 ドル/トン（前年同時期の価格：553 ドル/トン）

（価格は、タイ国家貿易取引委員会における2022年1月の第1水曜日のFOB価格）。

2021年1月以降、輸出用コンテナ不足による船積みの遅延から新規需要が低下したものの、パーツ高やコンテナ船からバルク船等への輸送手段の切替え、遅延していた船積みの開始による貿易業者のコメの調達から2月上旬に580ドル/トン台半ばまで値を上げたものの、アジア諸国の旧正月で輸出が低調となったことや、乾季米の流通が期待されたことから2月下旬には560ドル/トン台半ばまで値を下げた。

3月から4月中旬にかけても、乾季米の収穫進展による新穀の市場流通の開始に加え、新型コロナウイルス感染症拡大による消費の減退等で国内コメ価格が低下したこと、海外需要が落ち着いていることに加えて、タイパーツ安やタイ正月（ソンクラーン）を控えた低調な輸出需要から、500ドル/トン前後に値を下げた。

5月に入り、アフリカからの需要の増加やパーツ高から一時520ドル/トン近くまで上昇したものの、6月末にかけて、世界的なコンテナ不足や高騰する運賃、パーツ高などによる価格競争力の低下に加えアフリカからの需要の減少から、450ドル/トン前後に値を下げた。

7月から8月上旬にかけても、新型コロナウイルス感染拡大によりASEAN諸国の輸入需要が低迷した一方で、7月最終週のアフリカからの新規引き合いから、これまでより動きが活発となったものの、継続する世界的なコンテナ不足や高い海上コンテナ運賃による船積みの遅れ、パーツ安による輸出価格の下落等から8月上旬に410ドル/トン台前半まで値を下げた。8月中旬以降、価格下落によるアフリカ、ASEAN諸国からの新規需要により、8月下旬には420ドル/トン台半ばまで値を上げた。

9月に入り、主要な輸出市場であるアフリカやアジアの低調な需要から、9月下旬に400ドル台後半まで値を下げた後、10月下旬にかけ、パーツ高及び中国やアフリカからの新規需要により値を上げ、10月下旬には、410ドル/トン台後半で推移した。

11月に入り、パーツ安から410ドル/トン台前半まで値を下げたが、その後のパーツ高により11月中旬にかけて410ドル/トン台後半まで値を上げた後、12月には新穀が市場に出回るとの様子見から11月下旬にかけ横ばいで推移した。12月に入り、パーツ安から410ドル/トン台前半に値を下げたものの、貿易業者が輸出用の調達に動いたこと等から410ドル/トン台半ばに値を戻した。その後、年末の休暇にかけて輸出先国の新規需要が低調となり、12月下旬現在、410ドル/トン台前半で推移。



● 大 豆：14.02 ドル/bu （前年同時期の価格：13.76 ドル/bu）

（価格は、シカゴ商品取引所における2022年1月第1週末のセツルメント価格）。

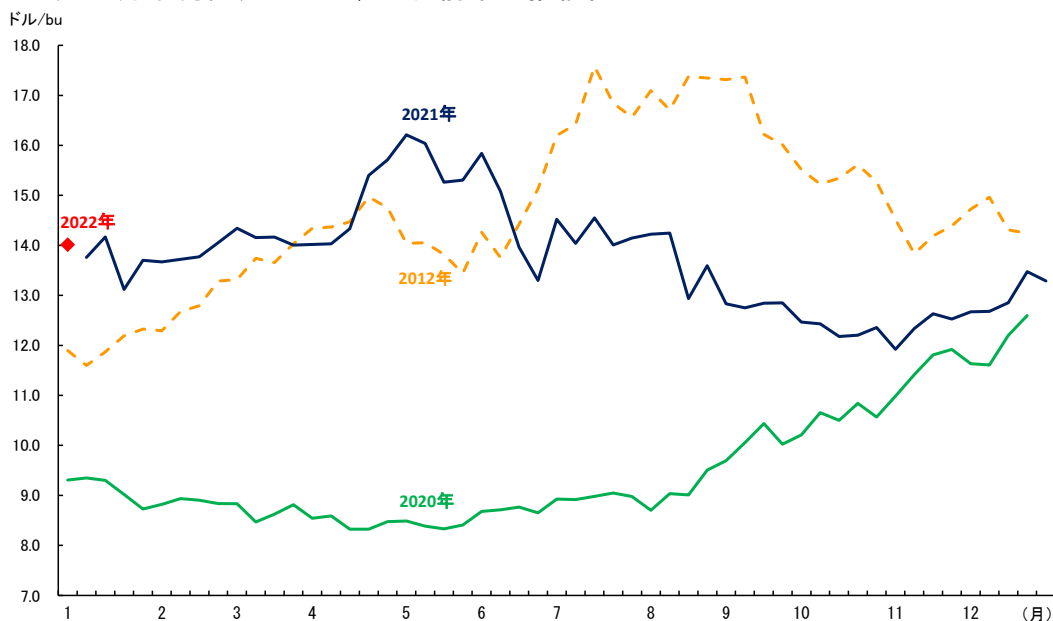
2021年1月に入り、順調な米国産大豆の中国向け輸出、USDA1月需給報告での米国やアルゼンチンの生産量の下方修正等から14ドル/bu台半ばまで値を上げたものの、南米の降雨による作柄改善期待から1月下旬に13ドル/bu台前半に値を下げた。その後、好調な中国向け輸出やブラジルの収穫遅延懸念、アルゼンチンの乾燥懸念等により3月上旬に14ドル/bu台半ばに値を上げたものの、南米の天候改善等から13ドル/bu台後半に値を下げた。3月中旬以降は、堅調な大豆油需要から一時14ドル/bu台前半に値を上げたものの、輸出需要が低調となり13ドル/bu台半ばに値を下げた。3月末には、予想を下回る米国作付意向面積から14ドル/bu台前半に値を上げたものの、USDA4月需給報告でのブラジル産の豊作見込から一時13ドル/buまで値を下げた。

4月中旬から、米国中西部での低温・乾燥による作付・生育への影響懸念、米国のタイトな大豆需給や堅調な大豆油価格等から上昇し、5月中旬には16ドル/bu台半ばまで値を上げたものの、ブラジルで収穫がほぼ終了し豊作が確定したこと、米国中西部の天候回復と作付けの順調な進展等から、15ドル/bu台前半に値を下げた。

6月に入り、米国中西部の高温・乾燥や米国のタイトな大豆需給、大豆油価格の上昇から、6月上旬に15ドル/bu台後半に値を上げたものの、同月中旬から下旬にかけて、ブラジルからの新穀大豆の輸出の開始や米国中西部の降雨、米国産の順調な生育から、13ドル/bu台前半に値を下げた。その後、6月末の米国作付面積報告で予想を下回る作付面積となったことから、14ドル/bu台半ばまで値を上げたものの、7月から8月上旬にかけて、米国コーンベルト北西部の高温・乾燥による作柄への影響懸念、主要産地での降雨や良好な天気予測、収穫が終了したブラジルの豊作見通しから値が上下し、14ドル/bu台前半で推移した。

8月中旬には、米国コーンベルト北西部の高温・乾燥や中国向け新規輸出契約から、14ドル/bu台半ばまで値を上げたものの、8月末のドル高や米国主要生産地の降雨、ドル高や8月末のハリケーンで米国ガルフ地域の穀物輸出施設が損傷を受けたこと等による輸出停滞懸念から、9月上旬には、12ドル/bu台半ばに値を下げた。

9月中旬以降、堅調な原油価格やとうもろこし価格、小麦価格に追随し12ドル/bu台後半で推移したものの、9月末のUSDA在庫報告で在庫量が予想を上回ったこと、米国の収穫進展、USDA10月需給報告での市場予想を上回る米国の生産量・期末在庫量等から、10月中旬には、11ドル/bu台後半に値を下げた。10月末にかけその後、植物油相場の上昇、堅調な輸出需要から12ドル/bu台前半まで値を上げた。11月に入り、USDA11月需給報告での米国産大豆の単収予測の想定外の下方修正や大豆圧搾高の伸び等から12ドル/bu台後半まで値を上げたものの、南米の生産地での降雨等から、12ドル/bu台前半に値を下げた。12月に入り、ラニーニャ現象に伴う南米の乾燥天候から13ドル/bu台半ばまで値を上げたものの、その後、南米の降雨から値を下げ、12月末現在、13ドル/bu台前半で推移。



注：シカゴ商品取引所の各週週末の期近価格(セツルメント)である。
 グラフは、価格が高騰した2022年と直近3年の価格の推移。

(参考2)

1 為替レート(対ドル円相場)

単位:円/ドル

2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年
103.39	93.61	87.75	79.76	79.79	97.71	105.79	121.09	108.77	112.13	110.41
2019年	2020年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
108.99	109.34	109.96	107.29	107.93	107.31	107.56	106.78	106.04	105.74	105.24
11月	12月	2021年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
104.40	103.82	103.70	105.36	108.65	109.13	109.19	110.11	110.29	109.84	110.17
10月	11月	12月	2022年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
113.10	114.13	113.87								

出典：為替相場(東京インターバンク相場) 東京市場、中心相場 スポット・レート
日本銀行; 主要時系列統計データ表 <http://www.stat-search.boj.or.jp/>
年別は、日次データの平均値。月別は、月次データの月中平均。

2 海上運賃(フレート)

単位:ドル/トン

2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年
93.65	50.71	63.59	54.88	49.18	46.63	44.35	30.30	27.92	38.48	46.42
2019年	2020年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
45.01	39.40	36.42	35.87	31.16	28.95	34.73	42.25	45.15	40.86	41.51
11月	12月	2021年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
40.94	42.39	46.28	52.33	55.71	56.55	61.85	69.35	81.39	77.18	77.99
10月	11月	12月	2022年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
80.26	66.15	64.43								

出典：米国(ガルフ)ー日本間、Heavy Grains, 50,000トン以上
国際穀物理事会(International Grains Council); Ocean Freight Rates, 「World Grain Statistics」, 「IGC
Grain Market Indicators」
年別は月別データの平均値。月別は、毎日価格の平均値。

3 原油価格(WTI:米国ウエスト・テキサス・インターミディエート)

単位:ドル/バレル

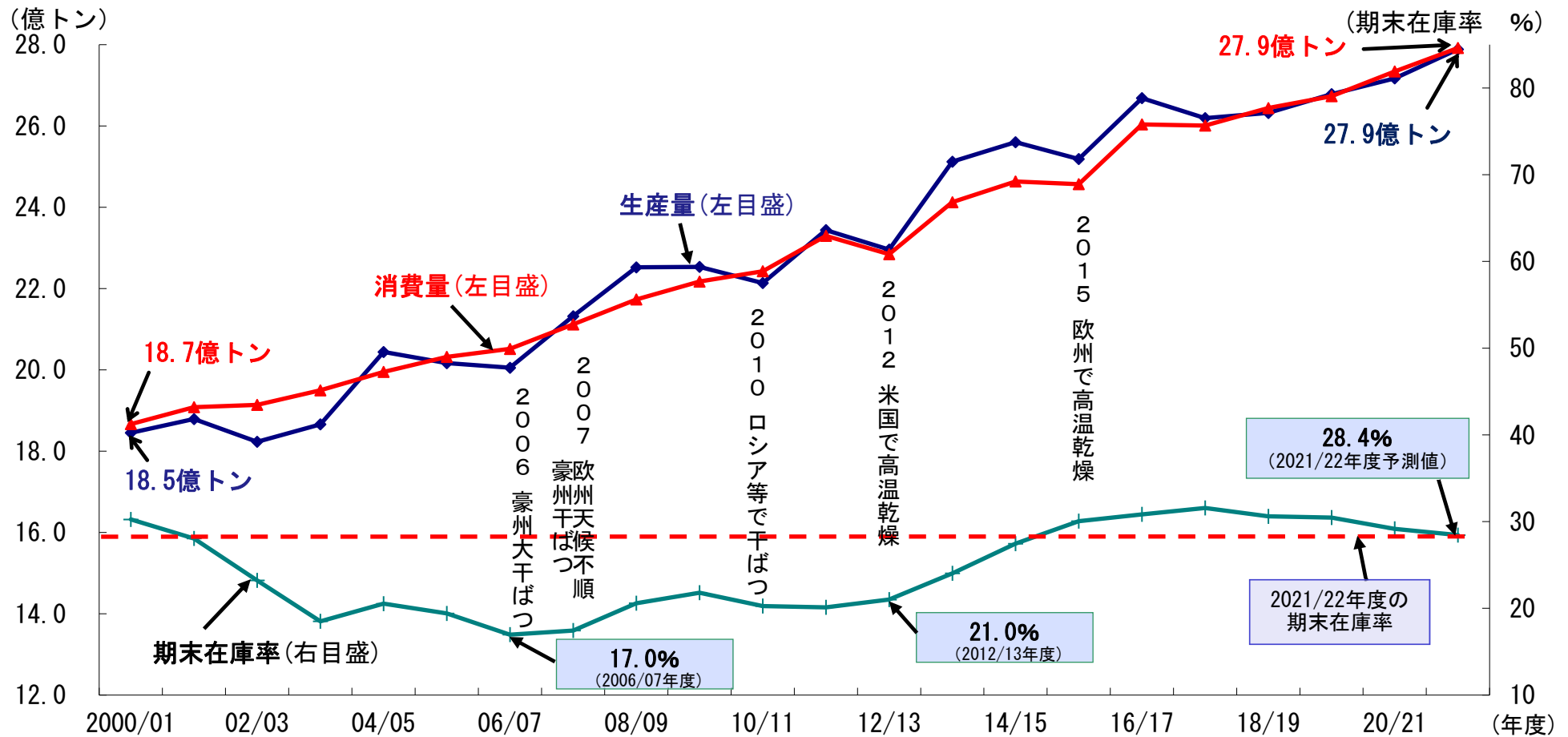
2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年
99.65	61.80	79.53	95.12	94.21	97.97	93.00	48.80	43.32	50.95	64.77
2019年	2020年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
57.03	57.53	50.54	30.45	16.70	28.53	38.31	40.77	42.39	39.63	39.55
11月	12月	2021年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
41.35	47.07	52.10	59.06	62.36	61.69	65.16	71.35	72.43	67.71	71.54
10月	11月	12月	2022年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
81.22	78.65	71.66								

出典：内閣府経済財政分析統括官付海外担当「海外経済データ 月次アップデート」令和3年12月, 120頁
但し、2021年12月 は、米国エネルギー情報局(U.S.Energy Information Administration)「Weekly Petroleum
Status Report」の日次データの平均値。

穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2021/22年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2021/22年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、28.4%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移



資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(January 2022)、「PS&D」
 (注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。